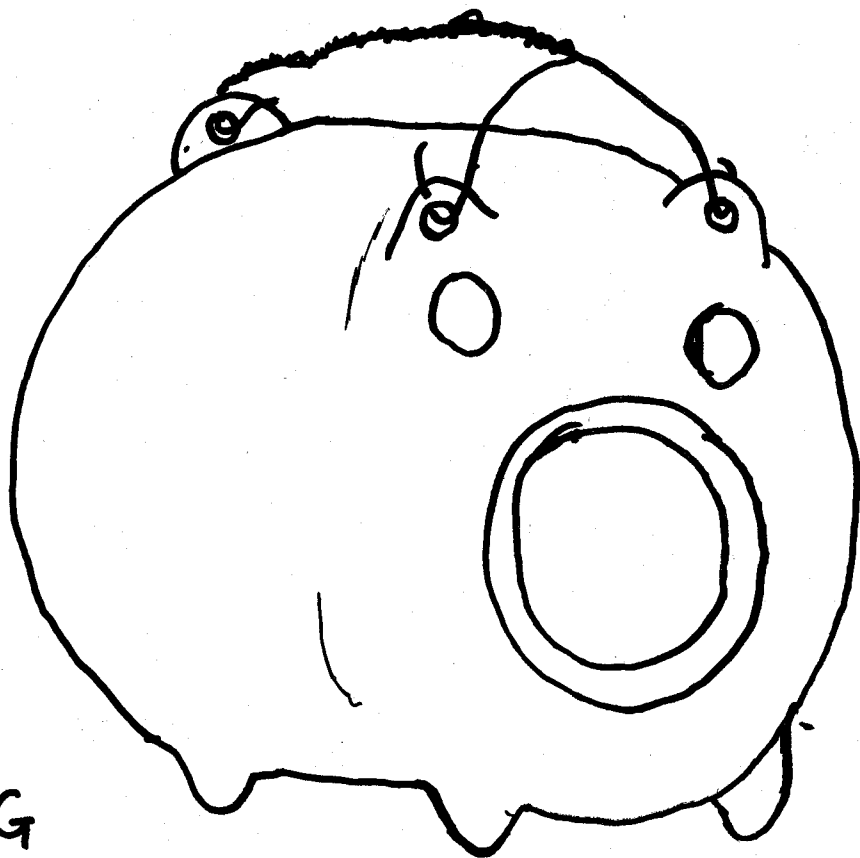




# ちしふ

117号 8 1973



T.G

# わいふ117号もくじ

——1973年8月号——

## 【テーマ原稿】

母親が外で働くことについて(2) .....	稲垣那智子	4
母親が外で働くことについて .....	森田 季子	6
女性の自立という事 .....	土井 邦子	8
母親が働くことについて(8) .....	高木由利子	9

## 【社会の窓】

三兄弟よたくましく育ててほしい .....	小川 倍恵	12
生きることなど .....	重川 雄	14
心の故郷 .....	荒木李恵子	17
「戦争おじさんへ」と平和への願い .....	岡部 節子	18
日記 .....	吉田てる子	19
和光学園の四季(1) .....	矢崎 好子	20

## 【文芸】

ある青春(21) .....	津堂 健治	24
短 歌 .....	原 圭子	30

## 【読書室】

「八甲田山死の彷徨」 .....	後藤美和子	31
------------------	-------	----

## 【お便り】

野波志都子 .....	11	森 弘子 .....	16
土喰 市子 .....	19	玉田 広子 .....	23
吉谷真智子 .....	28	平山 博子 .....	29
佐藤 泰子 .....	30		
7月例会報告 .....		後藤記	32
編集後記 .....		鈴木記	34
表紙絵の言葉 .....		後藤 俊治	11

## 【テーマ原稿】

# 母親が外で働くことについて(その二)

神戸市 稲垣那智子

毎日新聞のコラム欄に「女教師と母親」という題で次のような記事がのっていた。

小学校ではすでに半数を超し、教育の現場に占める女教師の比重は増す一方である。ところが、女教師と母親の仲はなかなかうまくいかないようだ。子供の担任には、男の教師を望み、女教師にあたると「運が悪い」と嘆く母親がまず多い。女教師の側にも責められるべき点はあろうし、同性ゆえにアラが目につきやすいということもあるだろう。しかし身ざれいにしていれば「おしやれだ」。「お化粧が濃すぎる」と言い、かまわなければ「だらしがない」ときめつけるたぐいの、次元の低い批判が多いのも事実である。ペテランのある女教師はこう言う、「私たちの苦労をわかってくれるおかあさん方はふえてはきました。ただ理解の質に問題があるんです。たとえば、集金、給食にはじまり、教室のカーテンのつくろいに至るまで、あまりにも多い雑務については、同情を示してくれるし、手伝ってもくれる。ところが学級の運営方法、家庭教育とのつながりなど、こと教育の本質的な問題になると、関心も薄いし、さっぱりのもてくれない。「おまかせします」と言われ、他のクラスと違うやり方を試みると、たちまち「おかしい先生」と非難される。男の教師として同じなのだが風当りは格段に女教師にきつく「や

っぱり女の先生は」となる。大きな理解と、寛容を女教師が母親に望むのは無理なのか、それとも女教師が母親の要求にこたえきれないのか、いずれにせよ、女教師がますますふえるのは必然なのだから、両者の関係、このままでいいはずはない。

と、毎日新聞はのべている。教師の世界にとどまらず、どの職場でも、「やっぱり女は」という考えが大なり小なりあるのではないだろうか。女として自覚しなければならぬことがあるにしても、結婚するまでは、こしかけ程度の仕事とか、結婚してから職業を持っていたり、母となって勤める場合でも、家事・育児・仕事の負担を持ちながらがんばっている、現実はいきびしい。こんど生まれ変わるものなら男に生まれて仕事をしてみたいなあ、とおもう私にとって、女、女であることのハンディキャップが目につき、仕事に生きがいを感じながら、家庭のみに逃避しようとは度おもったことか。またそのことが結局は、だから女は考え方が甘いのだ、男は逃げるところもないといわれたことがあった。

私たちには、産前六週間から八週間、産後八週間の休暇がとれる。その休暇は、裏付教員がくるので、休みがわりあいきちんととれる。年次休暇は年二十日間あるが、とったことがない。生理休暇も三日あるし、妊娠七か月までは四週間に一回、八か月から一週間に一回、一回につき半日または一日、妊娠月になると通院休暇というのがあがるが、同僚でいきらかに生理休暇の必要のある人も、苦痛をおさえながら出勤してくるし、通院休暇もとらなくて年次休暇として通院している。生後一年間は育

児休暇といって始業前、始業後三十分ずつ休みをもらうことができるように法律ではきまっているが、小学校の現在の状態では考えられないこと。

この休暇制度は、私たち先輩が、苦勞して獲得してくれた制度なのに、実際ほとんど利用されていない。それは、年次休暇に對して、何ら裏付けがないので、生きている四十名の子どものこと、ほかの学級への迷惑を考えたら、病氣の子どもをあずけて学校へ出ることになる。

仮に一つの学校に二十名の職員がいるとする。その人たちがひとめられている年休を二十日全部とつたとすると延日数は四〇〇日となる。一年三百六十五日としてわつたら毎日約一人の先生が休むことになる。年次休暇を認めるのなら、その裏付けが一人あるということであるならとれるが、現在は、同僚の奉仕の上で、やむを得ない年次休暇をとっている状態である。だから、休暇をとるなど考えられないことであるから、疲勞を押え出ている人、ここで一日静養すれば、あとすっかりよくなつてばり／＼働けるのにと思う人も無理してでてきて、後にその疲れから病にたおれる人もある。

また子どもが保育所にいくようになってから、保育所は五時までのため、私たちのように仕事の不規則なものにとつて、五時にむかえは無理で、むかえを他人にたのんで二重保育をしてもらっている人も多い。

実情にあわせた裏付けなしに、法律でのみきめられていても病氣になつても休むこともできないし、保育所でも、保母さんの増員とか、二交代制が確立されなければ、保母さんも、過重、

あずけるものも、過重負担となる。

働いている人間、女そのものを、国はどのように考えているか、勤めていながら、数々の疑問、又、諸外国の制度、働いている人に対する考え方のちがいなど、国によってさまざまであり、その国の主義と見えあわせると興味がある。

また新聞の引用となるが、七月十五日毎日新聞に「教育の国・北朝鮮」という題で、北朝鮮のようすが書かれていた。

すなわち女性性は結婚後も働き続けるのがふつうなので、そのための条件づくりが行われている。産前産後七十七日の有給休暇を過ぎると子供は託児所へ。「子供は王様」といわれるこの国では職場にも地域にも託児所がある。「町でいちばん立派な建物があつたら、それはきっと託児所」といわれるほど設備がととのっているそう。北朝鮮では一九七一年から六か年計画で労働者を骨の折れる労働から解放する「三大技術革命」と取り組んでいるが「女性を家事の重い負担から解放するための技術革命」もその一つにあげられている。家庭内での夫婦の関係は同じ目的に向かつて戦う同志の結びつき」ということでみられているので、夫もよく家事・育児に協力するという。

また北朝鮮では、「女性性は、男性よりもせん細・正直で、すばらしい指導力を持っている。」として、女性が活躍しているのは、教育・保健・商業・軽工業などで、教育は革命の後継ぎを養成するために重要視されているが、義務教育の学校では六割が女教師であつて、婦人校長も珍しくない。医師は、区域担当制といつて、居住区ごとに一人の担当医師がおり、きめこまかに住民の健康管理をするシステムでやはり女性が進出している

という。

日本は人間を労働力、または機械そのものと考え、スーパーマーケットの女性が、寸時も休まず、指をはげしく動かし、レジを打っている。台数をできるだけ減らし、女性を一秒でも早く指が動くよう指導し、人件費を浮かそうとするやり方、それは教育にもみられる。現在は四十五人定員で四十五かける二たす一で九十一名になると三学級となる。すなわち四十五にクラスの数をかけ一名でもふえたら、もう一学級ふやすことができる。しかし現在に到るまでに、かつて五十名定員のときがあった。その時、小規模校の学校にいて一年生入学が百名ちようど、もう一名いれば百一名で三学級で三十四人編成となるがその一名たらないため五十名編成で二学級、五十名の子どもを一つの教室に入れるだけで、すし詰め学級だった。

「ひとりひとりを活かす教育」「ひとりひとりを伸ばす教育」というスローガンのもとに、この現状、いかにたくさんの子どもを消化しながら、少ない教室で、先生を減らし、少ない先生で雑務もしてもらう。その姿には人間としての尊さも、子供は王様という姿もない。ただあるのは、長い長い買い物客の行列の数を必死に消化していく、レジを打つ女性の姿と共通したもののしか写ってこない。

まず人間があつて、世の中が動いているのだよ。世の中の動きのベルトコンベアーの中に人間が埋もれているのではないのだよ。子供よ、あなたたちが、これからの日本を考えていくのだよ。人間ばんざい。働く女性よ、がんばって。そして、どう

も、ごころうさん、ありがとう。もちろん男性も。こんな世の中でありたい。

## 母親が外で働くことについて

松江市 森田季子

私は結婚して、六月で満十年が来ました。結婚して、三年間、夫の実家へ送金の為、夢中で働きましたが、これは、自分自身の為でないという思いが、心の隅から片時も離れなかった事もあつて、決して楽しいという思いはなかった。又、私が、伊丹市にある、大企業の、ゆき届いた、職場で机に向つた何年間があつたので、この町に帰って来て、あまり恵まらない職場で、働いたせいかも知れない三年が終つたとたん、きっぱりと辞めました。私の性格が、潔癖、又何でもきちつとやらねば気が済まぬので、その三年間、全く大変であつた。子供が幸い？にして、生れなかつたので、何とか勤めたとは言え、身体が、参っていました。

そして、心身共に、安らぎを得た時、子供が生れた。男児で今、六才です。

子供が六才になった今も、働くならば、せめて、四、五年生になってからでないと思っている。私の場合は全く今の処、働く（家の他で）事は、考えていない。というと、経済的に恵まれてるからだろうと思われるかも知れないが、ノーである。夫が、普通の勤め人、商売人と違う職業である事、家を、年の

半分あけている事、もう一つは、多分私の理由の八割を占めるであろう訳は、私が八才の春の朝突然、母が亡くなった事が……。私達、兄姉妹は、父の手一つで育てられた。父の一生懸命やってくれる姿を見て、私共は、淋しいとは一言も口には出さなかったが、その淋しさは、口に言えないものであった。誰も居ない家の錠をあけ、皆が帰るのを待つ日々、冬の寒い日帰って、こたつの灰をそっと除いて、暖かくなる迄じっと待つ間、病気の時は、じっと寝て、父がいつ帰って来てくれるのかしらと時計ばかり気にしていた日々。

父は、何でも出来る人であつたので、又、姉が、中学を卒業して、家に居てくれる事になつたので、母親替りをしてくれたけれど、母の持つあの、温い思いやりと、そこに居てくれた日を思い出す度、又、その頃は、母親で外に勤めを持つ人は、近所に居なかつたせいもあつて、どこの家にも、母親は、いつでも居たのであつたから、よけいせつない思いを忘れられない。母を亡くして、十七年目に、子供が生れた時、精一杯、良い母親として、生きたいと思つた。私は、家事は、大好きなので、小は子供のバジャマ類から、大は、布団作り迄、やる。掃除も、庭に、一年中花を絶やさない事も、好きなのです。

又、子供は、ひとりっ子らしくないと言われる程、自立心も強く、腕白で、生傷の絶え間がない程、山へ川へと、遊びまわっている。服が、無事でいた事がない。川へ行けば、泥と水で茶色に染めて帰る、幼稚園へ行く迄は日に三度位、絵替えする日も決して珍しくなかつた。こんな坊主を、どうして置いて出られるだろう。

私の周りでも、以前は、小学校へ子供が、上る迄、内職が何かして働ける時迄、母親は家に居たのに、ここ二、三年前から、公立保育所が預かってくれる年令になるかならないか位から、勤め出される状態である。

私の住んでる所では、学童保育といわれるものは、私の知る限り市内に、一つ位しかない。従つて保育所以外の子供は、ほとんど、野放しの状況である。

坊主と同年の子供が、園から帰り、私の所に、「おばちゃん一緒に、弁当食べてもいい？」と、時々来ると私は、もうジンとして来る。

私は又、この子供達の親にも言わないであろう姿を、そうつと見る時、私の小さい時と二重写しになる。悲しい事でも、あつたであろう。掌で、二、三度、顔をふき、じっと何かを思い立ち止まつてる姿であり、「ちよつと出て来るから、又帰つて来てからネ」等と言う時、あの幼い子供の目をどう考えれば？、それを越えれば、強い人間？になれるかも知れない。でも、やはり時期というのがあるのでは？

そして、外へ出るなら、自分もだが、子供に対しては、それなりの準備期間が要ると思う。

又、何か特技でもあれば、それが、いかされる所を探がし、安易に、どこでも勤めればというのでは、雇主のいいなりでしかなりえないし、懸命に働く同性の足を、引張りかねないからである。

私の周囲でも、よくある事なのだが「働いてるから忙しい」と言い、公的な事を、やらない人がいる。ああいうのは、見て

ても腹が立つ、やはり、やるべき事は、やらねば……。

私は、夫の仕事の事務を、いっさいやり乍ら、「松江おやこ劇場」の運営委員をやり、幼稚園の研修部長（名前だけいかめしいが）をやっている。家にいても、女が何かの形で、地域社会に参加する事は出来ると思う。

逆に、此の頃は、働く婦人が、自治体などへの関心が、うすくなっていると、紙面に出ていた。

自分に、働ける条件が、満されている人、目的など、きちつとあつてやつて行ける女は、良いと思うが、男性的社会の中で、それなりの、働きをするのには、並の努力では、どうにもならないような気がする。

## 女性の自立という事

大阪府 土井 邦子

やはり経済的基盤がないと自立出来ないでしようか。結局、仕事を持つことになると思いますが、そうすると、主婦業を仕事と割切っている人は報酬が望めませんから自立できない事になりますね。経済的自立と、精神的自立が両方なくてはいいけないでしようね。

今は夫一人の稼ぎで、親子五人食べている。もしもの事があつて私一人で子供を育てる事になったら、何の特技もない三十

女にいったい、いくら稼げるでしよう。

去年、夫の友人が急死された時、日頃、呑気ものの夫もショックで、ごはんも食べられませんでした。

「ボクにもしもの事があつたら君どうする？」と聞かれ、私も青ざめる思いでした。

「まあ、わずかでも保険が入るから、それで家の残りを払つてしまえよ。後は食べるだけだから」と言うのです。

「当然、君が働くさ、いつも働きたいっていつてるからいいじゃないだろう」と、こうです。

プロの主婦ですと言える位なら、良いのですが、何しろ家事は全て苦手で、下手となると、これ以上、主婦だけにいるのも、何だか家族にも悪い様な気がしてきます。

育児や、家事だけの生活は、もの足りない、何か自分に向く事をみつきたい等の理由で、ずっと外で働く事を考え続けて来て、今となつてはせめて一番下が入学する頃迄、家に居ようと思つています。本当の理由はきらいな家事から少しでも、離れたいだけでも知れませんが。人間として自立する為とか、お金を貯えようと立派な理由じゃないのです。こんな心掛けで何かの仕事についたとしても、やっぱり結婚前のこしかけ就職と同じことかも知れません。独身時代、仕事は楽しいし、経済上も家族に負担かけることなく、やってきて、真剣に生きてきたつもりなのに、現在の意志薄弱な自分を、ながめると、あの時も結婚する迄の一時期だったにすぎなかったのかと思えます。

そして、本当に、＼もしも＼の事になつて、いや応なしに何とか働いて、子供を育てられたとしても、何と悲しい私の自立

でしょうか。やはり自立というのは、いつの間にかそうになっていたというより、目指して行くものの様に思えます。

どうやら私は、何もかも中途半端な性格から、たたき直さなければならぬ様です。

それにつけてもわいふの皆さんって、どうも立派な人が集まっている様ですね。刺激を受けることは大変励みになるのですが、ひがみというか、劣等感か、チラチラして困ります。

私は、この狭い団地のまわりを除く社会から、取り除かれていると思う事が、時折あります。私の友人で、独身で勤めを持った人が、よく遊びに来ます。私と二人で話をしている時は、学生時代からのくせか、私がよくしゃべりますが、そこへ夫が加わると、私は、一体、この人たち何の話をしているんだろうと思うことさえあるのです。都会はどんどん変るのだから当然なのに、「あそここの角、入った所のお店ね」とか、新しいビルの話とか、さっぱりです。そんなささいな事でも、淋しくなります。証券会社へ勤めていたので、企業名とか、そういう事に關しては、よく知っていたのに、最近は株価をみる必要もないから新聞も開かず、そんな事で、古い社名を言って笑われたり、夫と友人が、面白そうに笑ったりすると、シャクにさわったりするので。外に出ていれば、自然、目や耳に触れて知識とすることが、家に居れば自分で知ろうとしない限り、だめなわけです。責任転嫁するつもりはありませんが、これは夫にも責任がありそうです。給料内で家の中をきりもりし、子供に病氣させずに、ワイシャツ等しわになつていなければ、何も文句の出し、というのがそもそも、私を家政婦並みにしか見ていない

証拠です。なんて、これは八つ当たりというものでしょうか。

## 母親が働くことについて（その八）

### 修業時代

宝塚市 高木由利子

浜岡さんの御主人の紹介で、神戸のある印刷会社で丸四ヵ月間、色々な印刷の工程をみてまわることになった。

まず最初に文選部門、活字が部首別にズラリと並んだ背の高い棚から、熟練した文選工が原稿を見ながらポン、ポンと氣持のよい音をひびかせて、文選箱へ拾った活字を入れていく。勿論、はじめての私にそんな芸当は出来ないから、解版といって、使った活字をばらばらにしてもとの棚へおさめながら文字の配置を覚えていくのだ。一日中立ちっぱなしだし、小さい文字になると光った活字を見つめていると目が疲れて、大変な仕事だった。浜岡さんが専務によく頼んで下さったとみえ、じやまだけの存在であつたであろう私に、皆親切に教えてくれた。見るもの聞くものみなめずらしいものばかりで、あの頃は本当に夢中だったなあと、今から思うとなつかしい。文選がすむと今度は植字。植字というのは、拾った活字を、今度は、行間をいくらかあけて何行づめにするかという指定にそつて、活字と活字の間にコミというつめものをおき、わりつけ通りのスタイルに仕上げていく工程である。四分あきとか二分あきとかによつてコミの厚さがわり、その厚さを指でふれた丈で、すぐ言いあ



てられないようだとためて、文字の配置にもセンスが必要、かなり熟練がいると見受けられた。この人達は一月中机に向って仕事をしている。植字が終ると、これでゲラ刷りして校正に出す。校正がすむとそれを機械に組みつけて刷り。そして製本↓断裁↓包装という順序である。これで活版部門は終る。

次にオフセット印刷と呼ばれる平版印刷の見学に移る。活版と平版のちがいを一口に言えば、活版には凹凸があつて、凸の部分にインクをつけて紙に印刷するが、平版は名の通り平たい版である。感光剤を塗布した亜鉛やアルミ版に写真や文字をアーク燈などで焼きつけて、焼きつけた部分だけにインクがのるしくみである。この会社は平版の製版は外注しており、刷り専門である。しかしこの印刷機は大型で多色刷りが可能という立派なもので、電気製品の広告など、何十万という大きな単位の仕事をこなしていた。外注先の製版会社を見学させてもらったりもした。しかし、私のやろうとしているのはそんな大がかりなものではない。ほんの小部分の同人誌程度が刷ればいいので、平版の方は参考程度にとどめておいた。しかし製本などを見ていた丈ではわからないので、一緒に手伝いながら紙さばきやのりづけなど体で覚えるようにした。

そのあとは見積りなど営業関係の勉強。見積りは今だにむずかしい。紙代、製版代、刷り代、製本代、それに営業費を何%か、かけるのだが、利益があるように、しかも他社より高くない程度にというかねあいがむずかしい。

ちよつとした手ちがいのミスで、すり直しなどということになったら、それこそ大変な損害である。色々な工程を経てくる

ので、客の注文や日数のことなども、営業マンが約束してきた通りに、現場の方へ通じるかはなほだ心もとない。現場の方ではそんなにせかされて出来るか！という気があり、営業は得意先との間に立ってイライラしている。余程お互いの意志の疎通がよくないといけない。

従業員の出入りのはげしいのにもおどろいた。しょつ中人が入れかわる。私はたつた四カ月いただけなのに、結構古顔みたいになつてしまった。大体印刷の職人というのは、自分の腕一本を頼りにあちこちの印刷屋を気ままに渡り歩く習慣があるという事を、後に松本清張の本で読んで知つたのだが、それほど腕のない人でも長続きしない。パートのおばさんがいつまでも時間給を上げてくれないとばやいていたし、他所からひきぬかれた職人が、はじめの約束とずい分ちがうなどブツ／＼不平を聞かされることも多かった。専務をはじめ営業マンが職人を見下すような態度が感じられたりで、職場としてはあまりいい雰囲気ではなかった。私はそれらを見て、自分が経営する上での反面教師にしようと考えていた。

一応見るべきものは見たし、そろそろひきあげても良い頃だ。四カ月居た間に気のおけない人も出来て、特にその中でAという青年に私は白羽の矢をたてていた。田舎から出てきて文選工となり、途中からひきぬかれて入ってきた人だが、言う事はしやんとしており、仕事は出来るし、私と話がよく合ったので、もし自分の会社をはじめるとしたら、この人をひきぬくぞと心に決めて、その会社を去つたのだ。

さてその後、会社をはじめにしても建物がある。といつて

も遠方では困る。とにかく三人の子供をあずける保育所が近くに出来たから私が働けるので、保育所からは離れられない。近くの不動産屋を一軒一軒まわり坪三万程の土地をさがして歩いた。そのかたわら、中古の活版印刷の出版物があるのを見てまわったり、仕事をする上で不可欠だからと思って自動車学校にも通って運転免許を取った。

活版屋をはじめの準備をしているらしい——そんな話が十日市さんの口から小山さんに伝わりそれが御主人の耳に入ったらしい。小山さんの御主人は、新聞なども印刷している大阪の大きな印刷会社に勤めていらつしやる事を、その時はじめて知ったのだが、御主人曰く、「今から印刷をはじめののだったら活版はやめといった方がいい。うちの会社も写植部門にこれから力を入れようとしているし、活版屋が写植にきりかえようとしているケースも多くなっている」と。

これは耳よりなことで、早速会いに行つて色々教示していただいた。

活版をやるうとしたら職人に頼らねばならないが、年々職人の数が減り人件費も高くつく。写植ならだれでもちよつとした講習を受ける丈でマスター出来、しかも早い。活版は同じ字を百回使うとすれば百本の文字がいるが、写植は一つの文字盤さえあれば何回でも使用できる。しかもレンズを交換するだけで小さい文字から大きい文字まで自在に印字できる。従つて場所をとらない。活版は版の保存が大変だが写植はそれが簡単。色々聞いてみると、なる程写植の利点は大きい。私は強く心を動かされた。小山さんの御主人自身は活版部部长なのだが、私

には写植印刷をすすめられ、製版部長に私を紹介して下さった。そこで、42年11月から3ヵ月、私は小山さんの御主人の勤めている会社の製版部に、勉強の為置いてもらうことに話が進んだ。活版から写植への転換、思えばまわり道をしようだが、活版の知識をえた事は、決して無駄ではなかったと思う。

こうして書いてみると、私が会社をはじめのまでに、浜岡さんや小山さん等、わいふの人達の暖かい援助があったことが、あらためて思い出されてくる。

(つづく)

### ●新入会員からのお便り●

松山市 野波志都子

「わいふ」友人より見せられ、暇を見て読んでみました。特に編集後記は、読ませていただき、とても気に入りました。会員にさせていだきたいと思ひます。私は今、二児(一才二ヵ月、二才半女兒)の母親。石けん運動と乳児保育所を建てる為の勉強をしています。よろしくお願い申し上げます。

### ●教えて下さい●

溶連菌の感染症になられた経験のある方は、注意することなど経験を教えてほしいのですが……。 (大和郡山 杉本嘉子)

### 表紙絵の言葉

小五

後藤 俊治

\*\*\*\*\*

【蚊やり】うちでは、蚊やりのニクネームとして蚊ぶたと呼んでいます。この蚊ぶたに線香をたて、火をつけるのは、ぼくの仕事です。

### 三兄弟よくましく

#### 育ってほしい

西脇市 小川 倍 恵

五月十六日三男誕生、今度こそは女の子をと期待していたのに果せませんでした。しかし三六〇〇gの元気な赤ん坊。兄達が「アツ、あかちゃんもチンチンある」と、おむつを替えるたびに寄って来ます。これが一人だけ変わった子だったら説明するのに大変なのに、これでよかったかなと思います。

長男四才四ヵ月、二男二才十一ヵ月、そして三男、夫はこれでマージャンのメンバーが揃ったと未来を想像して大よろこびです。

昨年四月から新設なった近くの保育園へ二児をつれて勤務しました。私の若い頃からの理想論は幼児期は母親が育児をする出来るだけ高校卒業するまでは家にいてやる、そしてその後自分の好きな仕事なり奉仕活動なりを行うという事でした。しかし家庭の事情、地域の事情等でこういう結果になったわけですがし子供をつれながらの勤務はほんとに大変なことでした。

子供も長時間園にいることはとても辛かったようです。同僚にも迷惑かけることが多く、それによって自分の意見を強く主張することも出来にくく、保育面にもマイナスになったように思えます。私は独身時代は児童相談所、養護施設、精薄施設勤務の経験しかなく、保育園の保育に関してはあまり自信がありません。

せんでした。それに年令差、地域差（松江市で勤務していました）子持ちと子無しの差等からくるものでしょうか。それに私が勉強したのは一昔半も前の事ですから、私が想像していたのと、現在の保育園の実態というものはほとんど異なっていました。一年間に色々な講習会、研究会等にも参加しました。この一年間に感じた事は、この田舎の保育園でも何となく都会化してきているように思えるのです。先日雨の日に、子供を通園バス停まで迎えに出かけると、坂道の砂利の中をきれいな水が流れています。おもわず童心にかえって、つかかけのままビシヤビシヤと歩いてみました。何と心地よいことか。（そうだ、子供たちにもはだしで歩かせてみよう、どんなによろこぶことか）とうきうきしながら子供を迎えました。「この水の中はだしで歩いてみよか」と言うと、長男曰く「イヤ帰る」次男「ミズナカハイレヘン」と、水たまりや流れをよけながらさつきと帰ってゆきます。仕方なく私一人ザワザワと水の中を歩いていきますと、二児はほとんど同時にふり返り「アツ、おかあちゃん ミズのナカ ハイットツテヤー アカンのニ」靴下、ズックをきちんとはいた小紳士が軽蔑のまなこでにらみつけています。

あ、ア、わが子もこうもきちんとオしつけをされています。のかとあわれな気持になりました。

去年私は三才未満児9名を受け持っていました。雨あがりの日には、はだしで庭の水たまりを歩かせ、夏には制服を脱がせランニング一枚で涼しく、自然の中で思いきりと保育してきましました。しかしこれに対し、集団生活だし、それに暑さに耐える力を養うために常に制服は着用させねばならない、20人30人の

年長組では、はだしになったあとと始末が大変だし、それに足の裏をけがでもしたら大変だ、等々言われ、私の母親先生は甘すぎるから集団保育の中での性格形成が充分に出来ないのではと、若い保母さん達の目は厳しいものでした。しかし私は思います。あれはアカン、これもダメ、みんな一緒に仲良く、きちんとして、と、あまりにも規制やワクが多すぎる様です。最近是一人っ子が多いから、幼いうちから集団生活の中で社会性を養ってもらう為に保育園に入れられる傾向が強くなっているそうです。だから従来の保育に欠ける児童を保育するという目的をはずれて、集団保育の中でしつけをしようという保母が増えてくるわけだと思えますが、集団生活の中で最低限の規則を守らせ、健康第一にし、こうしてああしてのオしつけをしないと、子供たちは遊びの中で自然とルールを守り協調性等養われてくると思います。田舎は田舎のよいところを生かし、その地域の実情に応じた保育をしなくてはと思います。

114号の「毒入り油あれこれ」を拝読し、息子さんが「体汚染されてもええから冷たい水道水欲しい」「TマークでもMマークでもええ、ぼんぼん入れといてや、腹へるよりましや」とおっしゃっていますね。このたくましい小山さんの息子さんを羨しく思いました。最近のあらゆる公害では我が子の未来を考えて親が神経質になるのは当然ですけど、それでも息子たちは何ものも恐れぬ太い神経の持主になってくれたらナと思います。115号で後藤さんがおっしゃっていますように、私も今後、しつけとか何とか、保育園幼稚園等にあまり期待せず、自分は自分なりの養育方針をうちたててやってゆこうと思います。

幸いにこの周囲はまだまだ大自然が生々としています。去年一年間放っていた畑も最近せつせと手入れをしています。現在胡瓜、茄子、ピーマン、さやいんげん等を子供たちが帰宅してから収穫にゆきます。「ボクがとったなすびやでー」と野菜ざらいだった長男も食べるようになりました。これからは、はだしで小川へ魚とりに行ったり、裏山へランニング一枚でかけ登ったり、小紳士にならないように三兄弟を自然の中でたくましく家庭保育してゆきたいと思います。

しかし、定員に満たない保育園では二児をすぐ退園さすことも出来ず、この家庭保育も日曜日や帰宅してからのこと、一日の長時間を園ですごしているからには、いくら園に期待しないと言っても受ける影響は大きいのですから、今後は母の会会員として、ほんとうに母親は保育園へ何を望んでいるかという事を、大いにも申すつもりであります。

以上、まとまりのない文になりましたが、私が感じたままを書いてみました。この考え方には賛否両論あると思いますので、皆さまの御意見お聞かせねがえれば参考にしたいと思っております。で、よろしくおねがい致します。



# 生きることなど

枚方市 重川 雄

## 一、生きること

往年、トルストイの人生論を読んだとき、水車小屋の話が出ていたことが、微かな記憶として残っている。其の話とは即ちこうだ。

水車小屋の水車は、年がら年中只、単調な音を立ててグルグルと回転しているものであって、一体、何のために自分は回っているのか知ろうとはしない。しかし其の回っていると言うことと自体、大変な効果を人間にもたらせているということになっている。

こう言うものであったように、憶えている。

私共の生活上、毎日毎日同じような仕事を繰り返し行っている上に於いては、一体全体何のために、同じような仕事を単調に繰り返ししているのかと思うとき、如何にも無意味な、乾いた生活形式であるかに見え、自嘲したいような時が、往々にして起る。この場合人間はトルストイの言う水車と看做されている訳だ。

水車は何も考えない。併し人間は考える。何と単調な自分の生活形式であらうか——と言う風に、自嘲する。

併し、これを社会的に、どのような意義があるのかと見た場合、水車が生産する色々な成果と同じように、人間にも多かれ

少なかれの差はあるにしても、立派な意義を社会に貢献しているものであることを悟らなくてはならない。

こうした観念で、私共は常に生活が続けなくてはならないのだが、昨今のように、暑い季節ともなると、却々にそうした殊勝な気持にはなれないものだ。

## 二、昨今の魚

魚にはPCBとかが含まれていて、余り食うと、人体に悪影響が及ぶと言う発表があつてから、魚の売行きがガタ落ちしたと言うことで、それぞれの方面で、大変な騒ぎとなっている。

何も危険だと言われたものを、好んで食うことはなかうと思ふのが、私共一般庶民の考え方であらう。

誰でも、自分の命は大切にしたい。ところで、私が不思議に思ふのは、何処で獲れた魚か知らないが、何月何日、魚を無料で進呈します——と言う広告を出すと、当日は、其の店頭で延々と列をなして、多くの主婦達が集まって来て、それぞれに魚を貰って帰ったと言う話も聞いたし、また現実には、私共の町でも、これまでに敬遠されて来た寿司屋さんが、明日何時、店頭で、これまでに敬遠されて来た寿司屋さんが、明日何時、店頭で、当日、お祭騒ぎではなかうかと思つた程の人数が、其の店頭で寿司を食っている。

PCBは、食ったからだと言って、直ちには生命に影響が出ると言うものではないらしいが、食欲と言うものの恐ろしさを、痛切に知らされる。

餌が欲しさに、針で釣り上げられた魚の姿が、まさか人間にまで及ぶようなことは、よもあるまいとは思ふけれど。

### 三、友人

人は老境に入るに従って、友人が欲しくなる。即ち孤立してしまうことが堪えられないからだ。若い時代に於ける孤立とは、また別な淋しさなるものが生れて来るからだろう。

街で、或はデパートなどで、老夫婦が揃って仲良く散歩したり、買物などするのに相談し合ったりしている姿をよく見るが、それはそれなりに、一応は美しい姿だと、思う。

永年の勤めを終えて、年金などで老後を楽しんで生きられる老人は、幸福だが、そんな人は、今の時勢極めて少ない。

出来る限り息子達に頼りたくはない——と言うのが、老境に入った人の通有性とも言えようが、残念乍ら、この心意気を押し通せる老人は、そうざらにあるものではない。

それをしも、老夫婦が街で買物などを楽しんでいるのを見ると、余計に其の人達の幸福境を羨みたくなるのだ。

夫婦がお互いに頼りきって生きられると言う姿は、確かに美しい。併し物質は、こうした老夫婦に適當なる富の配分をしていであらうかと言うところに、私の疑問は生れる。

物質の問題は別として、私は今、こうした老夫婦の精神面の方を考えてみたい。

老境に入って、夫婦仲の極めて美しい人程、其の一方が欠けた場合、他の一方は至って短かい期間に必ず其の後を追うと言うケースが極めて多い。それは双方が余りに頼りきって生きて来たからだとも見られるし、其の落胆と淋しさの度合もまた、非常に強いものがあるとも見られる。

こうした落胆と寂寥感をなくすることが、老後に於ける生活

の一手段だと考えて、私は友人知己を多く持つことだと言うことを信じている。

夫は妻を、妻は夫を、唯一の頼りだと言うような生活方法は、私には気に入らない。私の生活指針は社交第一である。沢山な友人と交際を続けること。自然家庭へ帰っても話題は多いし、妻は妻の友人から得た話材を持ち出せばよい。

老後は、夫婦二人きり清貧に甘んじてても生活を楽しむと言うことがよいのか、また夫婦別々に（別居ではない）自分の志向する友人と共に外部に於いてそれぞれの趣味、趣好などに於いて老後を楽しいものとするのかの方がよいのか。と言うようなことについて考えてみるのだが、私は矢張り後者を採ることに大きな魅力を感じている。理由は、生活に活気が湧いて来るからだと言うもの。

即ち、居は共にしても、双方が自分に適した趣味に生きると言うことにも繋がる。

併し世の多くの老人は、前者に甘んじている人が多からう。だから、余計に老け込むのだ。

むかし、サイラス・マーナーと言う守銭奴が居て、人生金さえあれば何も要らないとし、貯蓄以外に人ととの交際はしなかった、と言うのがある。流石にこれ程の人も、死ぬときには持つては行けなかった。

勿論、不幸な時期への備えとしては、或程度の蓄えは必要ではあるが、老後、自分を守る方法として私は、社交第一と言うことにしてある。

## 【お便り】

神戸市 森 弘子

老後は夫婦二人きり象牙の塔に立籠って、安閑と生活したいものだと言うのもあるが、それはそれなりに、一つの方法でもあろうけれど、私には合わない。

老境に入った人が途上「年齢を取るとあきまへんなア」と言うようなことを、挨拶代りにするのがある。私はそんな場合、「この人は馬鹿だなあ」と、思う丈けである。

年齢を取ると言うことは、それだけ人生経験が深くなった訳である。だからこの経験を益々活用する方面へ目を向ける人でなくてはならない。

と、私は思い続けているが、日曜日、畑仕事に取りかかると、一寸小首をかしげなくなるのだ。

そうした時、無理に青年時代を思い起こそうとするのが不思議なようである。

朝八時からコートに出て、夕刻五時まで殆ど連続してラケットを振り廻しても、一風呂浴びると、翌日には何の支障も残っていないなかったではないか。と言うようなことなど。何しろ力仕事だから。

矢張り年齢か——と言うことが、微かに思い泛ぶ。

「どうだ、畑仕事は疲れるだろう——」

など、近所の人が時々言いに来るが、私は弱音を吐かない。

「何せ、百姓仕事は素人だからなあ——」

そう答えて、その機会を外さず、一寸休憩と言うことにするのも、矢張り疲労を感じているからに外ならない。

もう一度梅雨がやってくるのかと思っているうちに、本格的な夏がやってきました。暑くて暑くてたまりません。編集部の皆様、いかがお過ごしですか。何もしないでもうだるこの暑さの中で、いつもありがとうございます。

どういう訳か、主人がグラジオラスの球根を買ってきました。この春の事です。早速植え付けをして、ちゃんと花が見られます様にと、毎日水を忘れずにいた甲斐があつて、やっと咲きました。白と黄、それに赤。二人で育てたと思うと嬉しさはひとしおでした。

アンケート、遅くなりました。一気に書き終えて、読み返し。なんだか変なので、二、三日おいて又。でもピンとこないんです。答になっていない様な考えている事を、そのまま表わせない様な。

でも、しかたがないので、そのまま出す事にしました。又、機会があれば、何か書いてみようと思っています。



# 心の故郷

半田市 荒木李恵子

秋が来て店先に熟れた柿の実が出始めると、私はきまって一通の手紙を出します。

「おじさん、おばさん、お変わりありませんか。空の澄んだ三加和村の景色、今なお心に生きています……。」と。

そこは熊本県の一山村で私をはじめで教職についていた思い出の中学校があります。昭和31年頃といえは現在と違ってとても就職の時代でした。大学は出たけれど職はなし……の言葉がやはり男子学生でもなかなか職はないのですから私などとてもありません。やっと10月に就職の通知が来た時のうれしさ、今でも忘れません。近所のおじさん達も喜んでくれて下宿さがしや引越しを心配してくれました。

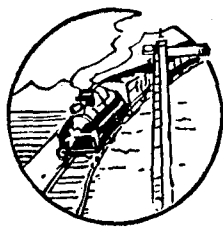
私の市から二つの山を越えて、四方を山にかこまれた三加和村があり、まるで水彩画のような景色です。近くにせまる杉山の濃緑、その前に広がる黄金の田圃、川の土手には夕日にすきが輝いておりました。

私の下宿は、村の中ほどにあり、毎朝自転車ペタルを踏みながら「おはよう」「おはよう」と生徒を追いついて通勤したものです。素朴な生徒との交わりは未熟な私をどんなに力づけてくれたことでしょう。それにもましてうれしかったのは下宿のおじさんおばさんの親切でした。毎朝お二人で田畑へ出て、も

くもくと働いておられたおばさんは、姉のように気をくばって下さいました。社会の風は冷たく泣きたい日もあったけど、優しい心に励まされて一日も休まず頑張りました。日曜日には、一年生だったトモちゃん、柿の実をいではそのままかぶりついたり、「秋の夕日に照る山もみじ……。」と唄いながら、色づいた山や畑を写生したりしました。

私にとって忘れることの出来ないこの村は、私の家族にとっても第二の故郷なのです。母が師範を卒業してすぐ就職したのもこの村です。二年間しかいなかったのに何十年も続いているクラス会には毎年案内状が来て、いそ／＼と出掛けます。今はおじさん、おばさんになった昔の生徒さんが帰りは自転車で途中まで送ってくれたそうです。そして私が就職し、次は上の弟が小学校に転勤して、そこでお嫁さんを見つけました。最後は下の弟が、この四月私の通った中学校へ転勤したとの手紙が来た時は、不思議な気持ちでした。

三つの村が合併して出来たという「三加和」の名前も私は大好きです。今なお手紙をくれる生徒達も今は若いママさんです。土地ブームで山がほりかえされ新興住宅の立ち並ぶ現在も、三加和村は、昔のままの姿で、二つも山をこえた、ひっそりした盆地にあるのです。このままでいつまでも私の心の故郷であってほしいと思います。





# 「戦争おじさんへ」と平和への願い

宝塚市 岡部 節子

八月の声を聞くとは恒例のようにマスコミは、平和とか原爆、終戦記念日の問題をとり上げる。ふと今年は何年目だったかしら……と数える自分に、一瞬ギクツとなる。——忘れることの恐ろしさ、「君の名は」ではないが忘却は同じ過ちを繰り返すことといわれる。まさに日本は戦争への道をひそかに、しかも着実に歩んでいる、いや地球全体が核戦争のとりこになっているといってもよい。

「再び戦争許すまじ」という強い祈念と戦争のむごさを忘れぬ気持は、今では原爆被爆者とか一部の人だけのものになってしまいい、うわべだけの豊かさに惑わされ、皆の心から消え去ろうとしている。ジャングルの元日本兵、彼方の地での核実験、内紛で片づけられる戦争、原爆記念日の平和式典等々、時おりのニュースが記憶をかすかに繋げているだけのものになってしまったのだろうか。戦時中、小学校いや国民学校の生徒だった私の年代にとっては、戦争のこわさよりも、戦後の窮乏の方が覚えていえるような気がする。現に大阪大空襲で家を失った私自身がそうだから。うちの子に戦争のことを話してやっても、TVのマンガに出てくる程度にしか理解していない。もっとも、年々教科書が改訂されるたびに原爆や戦争に関することは削られていくので、今の若い人や子供達が知らないのも当たり前だろ

う。子供らは口では私の手前をはばかってか、「戦争はイヤだよ、絶対反対するんだネ」とか何とか言いながらも、最新兵器で敵をバツ／＼とやっつけていく画面に、かっこいいと胸おどらせている姿をみるにつけ、戦争を体験した親の責任として、何とかしなくっちゃと痛感し、また焦りもする。

こんな私にとって、頭の中ではわかってはいるつもりでも、実感として、ベトナムは沖縄以上に遠い国である。長い戦いであったベトナム戦争も形の上では終結したものの、まだ本当に戦いが終わっていないことは、戦争を知る日本人としてよくわかる。アメリカがこの戦争に介入してから投下した爆弾の量は、広島型原爆で385発に相当するという。この戦いはアメリカの核兵器の実験場であり、一発で2キロ四方を火の海にするスーパーナバーム、レーザー光線で誘導するスマート爆弾、枯葉剤、ボール爆弾……名前を聞くだけでも核時代に象徴される残酷さである。

ふとしたことから手にした一冊の本「戦争おじさんへ——ベトナムの子の作文集」(KKベストセラーズ刊、500円)は、日本人カメラマンが、調印後のサイゴンとその近辺の町で写した沢山の子供の写真と作文集である。一見平和にみえるサイゴンの町、一握りの階級を除けば難民と孤児にあふれている。この戦争のため、家を両親を失い、手足や目を失った子供、孤児院に収容されたり義足をもらえる子はほんのわずかとか。平和であれば豊かなこの国の緑の山河でのび／＼と育ったであろう。父を戦争で失い、サトウキビを街路で売って一家五人の生計を支えていく13才の少女のけなげに生きる姿、ナバーム弾のケロ

イドと失われた足を商売道具にし、写真に撮らせて金を得て生きて行く少年。両親はいるが家庭が苦しい子供、戦争孤児、片親の子供と、この国の人たちの不幸はすべて戦争とつながる。必死に生きている姿、どこの国の子も変らぬつづらな可愛い瞳をみていると、胸がジーンとしてくると共に、あらためてもう二度と……という思いがこみ上げてくる。この本は南ベトナムでの取材であり、北のことはよくわからないが、しかし戦争がもたらす子供への傷あとは、北も南も同じだろう。

私の二人の子供に写真をみせ、作文を読んでもやると、少しは心を動かしたようである。ただ一言「ふーん、こわいねえ」「この子らかわいそう」これでいいと思う。やはり一人ひとりが語り継ぐことの大切さ、戦争の悲惨さを後世に伝え、平和のいしづえを築いて行く願いが、もっと大きな輪になればと、つくづく思う。

## 日記

高槻市 吉田 てる子

朝日新聞のひとつとき欄の、焼いた日記をよんで、私は胸にくるのを覚えた。何故ならば私の日記はタンスの奥深くしまいこまれて、主人にも、成長した息子たちにも見られまいと、幾冊かの日記帳がねむっている、私の人生のつらかったことを書きつづられて、そして夏の虫干したびに、着物たちといっしょに此の世の風にさらされる。私の目にだけとまって又、しまいこまれて行く。

結婚当初から、子育て時代、そして中年期にはいった現在、いろいろな不満と欲望を日記にはけ口を求め、切々と書き記し

てあるのだから、6人の子どもを育て、時代の変化を知ろうとせず、これが母性愛なのだという固まりをとところとせず、七才の元気で頑張っている姑、決して生やさしい辛抱ではないがいつかは私にも自由に趣味に生き甲斐を求め樂しめる老後が来たら、此の日記も無用となって行くことであり、役立った人生学校の日記はこれからも書きつづけます。

## 【お便り】

愛媛県 土喰 市子

前略、「わいふ」編集部の皆様、一方ならぬお骨折の程感謝で一ぱいです。

「知人」誌上でお馴染の荒木さんから「わいふ」を見せて戴き、とても身近に感じられ、紹介していただきわいふの一員となつて早半年余り、私も一ぺん何か書いてみようと思ひ込んでみるのですが、ちゅう躇してしまっています。私の青春時代は知人遠方の両親とよく手紙等書き筆を持ったもの。

この頃では電話という便利なものがありダイヤル一つで事が済み頭の中で考える事もなく手紙一つ書かなくなつた。考えた事、思ったことを文面に書き表わすむずかしさや、文を書くことだけでなく文字迄忘れがちで困っているこの頃なのです。もっぱら読み手専門になり申し訳なく思つて居ります。

一日中、目に見えたものではなしに雑用に追われ、年月と共に集中力にかけ心にゆとりもなくなつたように自分自身感じることさえあります。

「わいふ」は私にとって大切な知識を得る最も身近な誌です。

# 和光学園の四季(1)

東京都 矢崎 好子

その学校は東京の世田谷にある……門前に大木があつて、それを「子どものなる木」というそうだ。いつも子どもが鈴なりに登っているから。

私は長女の入学とともに教育問題に関心を持たずにいられなくなり、PTAの改革に熱中したのを手はじめに、だんだんいわゆる教育運動……民間有志の、教育をよくするための運動に首を突っこむようになった。現在「全国PTA問題研究会」の運営委員をやり、事務局員として事務処理をするかたわら、そこで出している「PTA研究」という雑誌の編集をしている。

もとより無報酬の奉仕活動だから、個人的利害からするとあまりこんなことに足をとられていては、よくない面もあるのだけれど……私はもう四十才を過ぎ、いまだにこれといつて身についたものもない人間なので、知りあいの同年輩の奥さんが、ヤレ大学へ入ったとか、何々の資格をとったとか、語学をやっているとかいう話をきくと、正直いって浮き足立たずにはいられない気持がある……もう少しまとまったことを、しておくべきだと思う。しかし一方では、個人の幸福は社会のあり方と密着したもののだから、今まで日本ではごくせまい、一部知識人によってしか行われ得なかった民主的・自発的な運動が、市民運動として広い範囲のものとなったのは、のぞましい進歩であるし、

それに参加するのも意義のあることだと思ふのである。

全国PTA問題研究会……略称全P研……には、教師会員がかなりおり、運営委その他で、先生たちと親しく話し合う機会が多かった。それに、地域の教育懇談会……東京ではかなりさかんである……に参加していたこともあつて、教育に関する情報に、多く接することができた。

私はなるべく冷静な判断をしたいと思つてゐる。

やつてゐることからしても、ムヤミに悲観していい立場ではないのである。しかし知れば知るほど、現在の教育は悪い状態にあり、一つ一つの要因を洗つていくと、将来には絶望しか待つていないという判断に傾かずにはいられなかった。

上田薫さんという、上智大の教授がいつた。

「お母さん方、お気づきでないかもしれないが、もはや日本の教育は崩壊していますぞ。」

この人の言葉は、私の実感とぴたりと合つていた。ぞつとしたのをおぼえている。

現在の教育は理念においてエゴイズムであり、機能において官僚主義である。

どなたもお気づきであろうが、学校では子どもを成績順に価値づけをする。いろいろないわけつき……親は成績を気にするとか、これはけつしてお子さんの価値ではないとか……ではあるが、本質は価値づけなのである。どうごまかしてみても、勉強のできる子はよく、できない子はわるいのである。これを土台にして、できる子でできない子を仕分けしていき、中学がおわると、普通の成績ですから、ご心配ありませんなどといわれ

ていた子が、公立の高校には入れないのだ。現在東京では、上位三十パーセントの成績のものしか、公立高校の普通科へ入ることはできない。中ぐらいの、いわゆる普通の子は私立へいくほかに、下位のは職業高校へふり分けられる。職業高校は、勉強するところというより、職業訓練をするところなのである。

できない子とその親は（しかし全体の七十パーセントもの！）まず金銭的にできるものより損をするし、（私立では入学にあたって十五〜三十万もの費用が必要だ）このふんでは子どもの将来に、ろくなことがないのではないかとおびえずにはいられない。学校は口先でうまいことをいいながらも、あなたの子どもはダメな子です、だからお金もたくさん要りますと、そういうところへ彼らを追い込むのである。職業高校の場合には、もっと気の毒な状況があるが、こまかい話はおくとして、こうした選別の機能をもっとよく発達した教育なのだ。すこし暴論かもしれないけれど、学校はただ頭のいい子と悪い子を、順位づけていただけのように思えるくらいだ。教育の中味？ 中味といえば理念であろう……それは、人より勝つのがよいことだという、それだけのことではないか。理念においてエゴイズムだというのは、このことである。

ある母親はいった。「おそく下の子が出来た上、商売をしていますので、赤ん坊をかかえ、上の子の勉強をみてやることができますでした。成績は中以下でしたけれど、とても性格のよい子で、父親が心配ないといえますから、私も平気でおりました。ところが中三になって、進路指導があると呼び出され、

いつてみましたら、お子さんはどこにも入れませんが、国数英が悪いから、私立もむりでしよう、と、とりつくシマもないんです。私ものんきでわかったのですが、どうしてもと早くいつてくれなかったんでしよう……」

これは間拔けた母親だという他ないのである。学校が口先だけのごまかしをいい、責任のがれに悪智恵をふるい、不親切でよい悪いじめをする体制を持っているなどとは、（じつさいそれは体制なので、その中に組み込まれると、立派な先生もそういう行動をとらされてしまうのである）想像することもできず、「信頼しておまかせ」してきた結果がこれなのである。

これは私は機能において官僚主義だというのだ。  
ある高校の、数学の先生がいった。

「数学を教えるには、順序つてものがあります。ところが先に教えないければならんものが後に入り、後であるべきものが先にきているので、それを改めるべく運動をしたのですが、それだけのことに何年もかかった。」

でも改められたのはまだいい方で、まず悪いと分つていても、一たんきまめたことは改められないのだ。

官僚主義のきわまるところ、こういう話まで出てくる。若い女教師、

「子どもが交通事故にあつたというので、おおいにおどろき校長に報らせにとんでいった。とたんに校長が、『どこでだ！』というので、場所をいつたら、『よかった！ 学校の責任じゃない！』 子どもがどうなったのか、けがですんだのか死んだのか、それは気にはならないようでした。」

先生が管理職になるためには、熱心に準備をして、よい授業をすること、子どもの面倒をよくみることなどは、必ずしも必要ではなく（まったく必要でないという人もある）研修会まわりというのが利くのだそうである。文部省や区教委や、教育研究所など、つまり「上」が行なう研修会にひんばんに出席して、発言し顔を亮る。

ばかげた話はどう止めよう。でももう一つ……。

「教師の職務は三つに分れます。一つは校務分掌といって、おしらせ、報告書、その他の文書づくりから、行事の準備いろいろ、もう一つは雑務、集金とか給食とか、事務ですね。（給食は献立から発注、支払、集金までするそうだ）それから授業とその準備で、それぞれきずつの感じですよ。」

教師本来の仕事には、きの時間しかとれないといっていた。

いえばきりがいい。親は親で、「なんとか〇年生で分らなければならぬ水準まで、教えていたきたい。きくところによると、隣の組より大分おけているそうで……。」などと、「それほど気持」で先生をいじめめる。学校がまだいけば何とかなるところだと思っている親は、である。はしっこい親は何にもいわない。だまって家庭教師をつけ、塾へやる。

教育が崩壊すれば、次に何がくるか。社会の崩壊である。

進歩的な教師たちは、教育の反動化をおそれ、教えることの中味にこだわった。教科書がわるくなった。神話が復活した……もちろんそれはよくないことである。しかし敵は同じ手で攻めて来ないこともある。

敵はすでに、戦前のデマゴギー教育が、達成したと同じ成果

をあげているのではないか。つまり、選別教育という方法で、大部分の国民を、無智にすることに成功し、一部の秀才をひろい上げることに成功している。近くこの傾向はますます強まり、教育内容の高度化という美名のもとに、切り捨てられる子どもの数は多くなり、年令は低くなるだろう。中学へ入ってくる子の、二十パーセントは分数が分らないそうである。また高校へ入っても、授業が分らずつまらなさのあまり、中退してしまうものがふえつつある。中学生の自殺……毎日ないことはない……年間届け出られたものだけでざっと四百人、かくされたものも加えれば、七、八百人にも達するらしいという。（国民教育研究所調べ）

私は小田急線の経堂で下りて、十分あまりの道を歩き、和光学園の前に立ったのであった。昨年の春のことである。国民の大部分を無智にする教育というものを、私は深い危機感をもって憂えずにはいられなかった。けっきょく社会はその構成員多数によって、運命を握られているのである。戦前、ファシズムの横暴を平気で見すごしてしまつた民衆の無智は、教育によってつくり出されたものであり、その結論が戦争であるのだ。

いったい私はどうすればよいのか？ 何ができるだろうか？

私は自分の娘を和光学園へ入れたいと思い、しかもなお迷っていた。胸中には戦前戦中に、勇敢にもわが子を学校へやらなかった親（宗教的、思想的立場から、かなりいたという）のことが浮かぶ。和光学園は民主教育のとりでとして、選別を排し教育基本法に則った教育を守っているといわれる学校である。みれば建て増しの結果か、名高い「子どものなる木」は、建物

と低い塀とははさまれてしまつて、枝を落されもはや子どもが登ることもなさそうでありさまだつた。ここにほんとうに「よい教育」があるのだろうか。あるとしても、娘をここへ入れるのは、敵前逃亡ではなからうか……。

(つづく)

## 【お便り】

箕面市 玉田 広子

毎日きびしい暑さが続いて居りますが編集部の皆様お変わりございませんか。

毎月かかさず「わいふ」お届け頂きありがとうございます。会費を早く送らねばと思いつつ皆様の文章を読ませて頂きますとどうしてもペンを持つ手がすくんでしまい皆様に少しでも近い立派な文章をと願う気持とは裏腹に全然ペンが進みません。どうぞお許し下さい。

我が家が今年から次男が私立の幼稚園へ入園し「母の会」の役員を引き受けてしまい幼稚園に関する文を読むたびに私も一筆と思いながら皆様の様にすら／＼とペンが進まないまま今日に至り会費も滞り、アンケートにも答えず編集部の皆様の御苦勞を思う時大変申し訳なく思つて居ります。

後藤さんの幼稚園に関する記事、現代の幼稚園に要求するママ達の姿勢を見た様な気がして何となく肌寒い思いをしました。次男の幼稚園はすべての行事に関して「母の会」におんぶした格好で（これが私立と公立との違いかもわかりません）運動会

の費用からバザー、敬老の日のプレゼント、クリスマスプレゼント、卒園、入園事の費用、先生の夏期研修費の一部負担等数えあげればきりがありません。又、労働力もしかり、お迎え当番から給食当番、掃除からは父親参観日の接待（飲物）や夏期保育の手伝い等役員ともなると毎日の様に親までが園に通わなければならず、次男が幼稚園へ行けば少しは私の時間が出るからあれもしようこれもしようと思つていた私の夢は無残にも打ちくだかれかえつて前よりも忙しくなった様なわけです。

ある人が「幼稚園の役員なんかになるものではないワ」とおっしゃっていましたが、やはり子供が二年間もお世話になるのだからと言う気持が働き役員も簡単に断われず、ただ保育料だけ払つておけばあとは子供が毎日休まずに通つてくれれば良いと言うのもどうかと思うのですが……。

とにかく箕面市にも早く公立の幼稚園が小学校と同じ数ぐらい出来れば良いのですが、今の所ど／＼人数の増えて行く箕面市にとって公立の学校を建てるだけで精一ぱいの様です。

今まで家の外の事は何も知らずにのほほんと暮らして来ましたが、これからはもっと地域活動にも積極的に参加して行きたいと思つて居ります。

遅くなりましたが会費二千円同封致しました。引き続き「わいふ」会員として皆様のお仲間に加えさせて下さいませ。

## ある青春(21)

大阪市 津 堂 健 治

敵機襲来、都市崩壊、不発弾埋没、友の召集令状、僅か一日の出来事が、すべて異様で信じられぬ程だった。

健治はとしと共に山佐の下宿へ行き、部屋のかたづけを手伝う。四畳半一間だから整理は早い。食器類が多いのにとしは目を丸くした。

「大作さん、食欲旺盛なのネ」

「それはそうサ、あのからだだもの」

健治はつとめて明るく振る舞おうと友の腹を指さす、棚の書籍は束にすると「相撲雑誌」のあるのは判るとして「山岳」の本がかなりあった。

「山が好きなんだネ」

「一度、君と一緒に「穂高」か「白馬」あたりへ行きたかった」

中学時代、信州の山はあらかた登った由、アルプス連山、飛驒、本曾そして伊那等々。

登山中、猛烈な雨や吹雪に遇うとウンザリし、『もう二度とこんなコトするものかと思うのだが、暫く経つと亦行きたくなくなる』  
熱っぽく「山」を語る彼の意志の強さに感心すると、

「人間は誰でも生まれた環境に愛着があるだろ、俺の場合は山で囲まれた土地だからそうだったのだ」

元来、人間は冒険心をもっている、平穩に生きるのは、むしろ

本性に脊くもので、きびしさの中にとびこんで自己を試すのが素晴らしいのだ。そんなふうにする。

健治は友の召集について一言の言葉も吐かなかったが彼の「山」への執着と「戦場への突入を同一視していぬのは判っていた」。

夕刻、下宿家の人が祝いの配給酒だと銚子を数本届けてくれたのに燗をしとしはどう都合したのか秋刀魚と卵を食膳に並べて、「明日、来ますから」と辞し去る。翌朝の食堂準備で戻らねばならぬらしい。

「残念だ、としさんが帰ってしまつて……」

「いいさ、今夜は二人でゆつくりやろうよ」

「俺はあまり呑めないけど、君とは当分会えないのだから、無理するよ」

「いいぞ、さあ」

大作の大きな手が銚子をつまみ盃を充たした。

「こんな時、どう言つて乾盃するのかナ」

「さてね、俺にも判らん」

カチリと盃がふれあった。

「明日、発つのか」

「ああ、学校へ寄つて、切符を買つて……工場の連中に宜しく言つてくれ」

「いいとも、けど皆、淋しがるやろ」

「アポの免状貰いそこねたのが心残りだ」

「俺だつて明日のコトは判らんよ」

山佐は一々うなづいて盃をあげる、健治も幾杯かの酒でホロツとしてきたが、昨夜の焼酎が未だ残っていた故だろう。

「考えてみるとおかしいよ、昨夜は逸川と添寝で今夜は大作君と一つ屋根に寝む、これが女だったら大変だな」

友は大きく笑った。それから突然に言う、

「ケン、君はとさんが好きなんだろ」

健治は酔った頭の中で言葉をやがしていった。

「俺はpurpleに弱いのだ」

紫が、そお言えば彼女、紫の和服をよく着ているな、あの色は現実ばなれした美しさがある。」

夏の日の浅間行を健治は偲んでいた。それから時折折翳のように不安を掠める白い療養所の建物を想う、とさんと関わりのあるやうな気がしてならないのだが、彼に質ねれば判るかも知れないと考えた。

「としさんは未だ独身なの。」

盃につきながら思いきって口を開いた。この事だけは知っておきたかったのだが、

「勿論、そうすら」と、こともなげに返事してから魚をつつく、何のけれども無い答に健治は安堵して質問を止したが友はその後、常になく能弁になる。

「俺はとしさんに心を動かした事がある、が彼女自身乗気でなく皮肉にも妹がそうだった。けどそのくみと一緒にあって彼女をいとおしく思う自分に満足する、夫婦生活、といっても十日足らずだから不審に感じるかも知れんが、当人が言うのだからな」

「……………」

「よく理想がどうのと言うけれどそれは理屈だ、一般論だ、観念的なきれいなとき、俺の伴侶を俺が愛すればいいしくみは俺を慕ってくれる、それで充分すら」

大作は酔っている、酒にというより彼の現在の心情に――

「尊敬の感情と恋愛とは重要なつながりとは思えぬ、人間愛に富むとか清純な人柄だから愛が生まれるとも限らぬ、たとえ不美人の女性と性格破綻の男でも、彼等の愛さえ確立していれば美しく昇華するだろう」と。

「古書で雄略帝のエピソードを読んだ、彼は卑しい娘に愛をうちあげ、そのうち宮中へ招くからと言ったまま年を経て、女性には八十才の老婆になるまで待った。天皇はたわむれにそう告げたのではない、もし、そうならそんなに彼女は待てなかつたらう、二人の間には相愛のテレパシーがあつたのだ、雄略帝は、たえず彼女を思い乍らも政治の繁雑さに妨げられ、結果がこうなつた」

ここで盃をほした、健治は煙草をくゆらす。

「もつと極端な話がある、織田信忠と武田信玄の娘は夫婦であり乍ら――戦国時代の政略結婚にせよ――互いに一度も会わないで二人とも夫を妻を、いとしと呼びあつて死んでいる。純粹とか可憐を感じないかね、尤も馬鹿らしいと思えばそれまでだけど……………」

山佐大作の激しい恋愛論には圧倒されて声もでない、

「ケンば文学好きだからイウセンのペールギュント、読んだろ」「悲しい物語だ」



「俺はベールギェントになるかもしれない、くみはきつとソルベグのように布を織り乍ら戻る日を待ってくれるだろう。」

歌劇の哀調ある旋律が想いだされ、放浪の旅から戻った老ベールギェントに老いた妻のソルベグが「お疲れでしたね、いとし貴方を私がやさしく揺ってあげます。お眠りなさい」と告げる。

「素晴らしい女性だよ、ソルベグは」

「くみもそうしてくれると思うのだ」

「大作君は幸福なヤツや」

二人は、かなり酔い、霜月と思えぬ程にからだはあつくなくて居た。

「ダイサク、俺は心残りの事がある、工場の連中と学生の対抗相撲に君が出られなくなったやろ、君はうちの横綱だものな」  
「相撲な、俺も工場の部長がどれ程手ごたえがあるか一番とって見たかった。」

「ヤマザル関のしめこみ姿も見たかった」  
すると彼は赫あざくなった面をきつとむける。

「よし、ケンが希まれむならお目にかける」

言いざま、脊を向けて包みを一つ解いたら『K中学』とマークのある黒まわしを示し、衣類を脱ぐとまわしをきりりと締めて仁王立ちに健治の前に立つ。

陽やけた肌に朱がさし、黒のそれが鮮やさだ。

「ヨオイシヨ！」 畳の上だから手かげんしているのだが隆とした腕、胸そして腹と股の筋肉が揺れる。颯爽たる四股だ。

それから彼は胸を叩いた

「ここへ、ぶつかってみないか」

「!?.....」

「遠慮はいらない、さあ！」

両手を大きく広げる。そこで健治はふらつく腰に力をこめ、胸にとびこむ。

「おオ、トト！」

がつちり受けとめられ、更に大きく胸をひらく。

「まだ／＼、もっと力をだして、もお一丁！」

「よし」今度は全力でぶつかった。

「タハァー」

唸るように抱きとめ暫く荒い息使いの二人だったが、健治はその胸に叫んだ。

「ダイサク、死ぬんじゃないゾ」

涙が厚い胸に流れたが同時にグツとのど元のつまるのが聞こえた。

「ケン、俺を忘れないでくれ」

健治ははてる肌に幾度もうなづいてみせた。

✕ ✕

酒宴の後は蒲団を並べて横になった、灯火管制下、窓より見えるのは凍りそうな夜空、視界は限られた四角の窓の世界だが、そこを星座は刻々に移り過ぎる、窓は舞台だ、次々と現われる星の踊子達、視界一杯の時もあれば、片隅にソロでそっと光るシーンもある。そうした光景に見とれ乍ら健治は大作と「人間戦争」「愛情」に就いて繰返し話しあったが窓が淡いブルウに溶ける頃、友は激しく口走った。

「国家とは何だい、俺にははつきりせんのだ！」

「……………」

「俺の判らん」国家「てヤツが憎い！」

彼は泣いていた、が、女々しいそれではなく、声は少しもふるえていない、健治は友の手を握り力をこめると均しい握力が戻り、静かな口調が聞こえるのだった。

「君の友達は、いつまでも忘れない……有難う」

健治も言う。

「大作みたいな友人をもった俺は幸運だったよ」

それからこうも言った。

「明夜は小諸の月をくみさんと一緒に見られるやないか、きらいやで……」

すると泰らかな寝息だけが応えてきた。

すると踊子達は姿を消し空は暁を告げるファンファーレを奏でている。

×

×

翌る日、山佐が学校での手続をすませるのを待って二人は初冬の上野を歩く、空は曇っていて吹きあげる風は冷たくオーバーの衿を立てていた。

ふと見ると黒いものが跼まっている、近づくと蝙蝠傘で、ひょうりとセエタア姿が現われたが白人の少年だ、今どき、外人とは珍らしく笑い乍ら近よると少年はおど／＼した素振りになる。

“Are your parents anywhere about here?”

訊ねたが一層おびえた様子だ。

「何か持つてるようだ」

山佐が指摘するが成程、うしろ手に隠している。

“What matter with you? We'll can help you.”

ゆっくり優しくすると、黙って手の中のもののみせた、雀だ、だいぶ弱っついて羽毛につやがない。

「こいつは駄目だな」

呟やくと少年は哀顔の目つきで二人を見る、助けてやって呉れと言うのだろう。健治の背後に居た山佐が「よし」と雀を手にした。

「有難い、まだ生きられそうだ」

彼は健治よりゆっくりした英語で話す、

『コノ小鳥ヲ、ナルベク早く、火ノ傍デ温メナサイ、ソレカラ、オ茶ヲ口ノ中ヘ綿ニシマセテイレナサイ、ソシテ綿デ包ムヨウニシテヤルト元氣ニナルデショオ』

やがて少年の目が輝きだし、傘を取りあげると「アリガト」と片言を発し、早口でつけ加える。

“I am Japanese! My mother's American but father's Japanese.”

少年は小鳥を大事に抱え馳け去ったら、山佐の重い口がう／＼く。

「戦争している日本人は可哀そうだ、アメリカ人もだ、その両方のあの子をもっと哀れだ」

「同じ人間やのに……な」

又、言葉が低くなる、こうして歩く友人は全く静かで昨夜の雄々しさはない、が、黙りこくつていながら一秒一分の間に対話をくり返しているのだ。

それから次のような感慨もわく。

特定の間と別の人間が生涯のある時間、帯で同じ situation で近づき、時流の一点から離される、人生における交流とはそうしたものだろう、運命と片づけるにはあまりに儚ない、『人は生れ、苦しみ、そして死ぬ』この言葉に突き当たる時、寂寥を超えた観念が諦めの平静に移ってゆく。

「駅へ行くとするか」

友は入営に備え腕時計のガラスがこわれぬようセルロイドのカバアをしたのを示す。

上野駅が近くなる、健治と大作の二人だけの時間帯も終焉に近づいた。

見送りの松山としと落ち合う場所へ足を進め山佐大作は『対話の結末』を述べる。

「今日までつきあってくれて嬉しかった、俺は薬学生としての生活に悔はない、本当に有難う」

言いきった時、息をはずませたとしの姿が見えた。紫の着物にもんぺばかりである。

## 【お便り】

三田市 吉谷真智子

暑さ厳しき折柄、わいふの皆様にはいよ／＼御壮健のこととお慶び申し上げます。

三田盆地も毎日うだるような暑さが続き、閉口しておりますが、夏は暑いものと思い、田や畑の手入れに汗水たらし頑張っています。世話をすればするだけの甲斐あって、稲はよく分結

し、青々と成長しており、畑では、キュウリ、ナス、トマト、西瓜、ピーマン、山ノ芋等種々な顔で美人コンテストを競っております。新鮮な野菜をもぎとり、夕餉の卓上に並べる時のうれしさは又格別です。自分の手で栽培する喜びは最高です。このよろこびを得られる私は幸せと思っております。西瓜大好物の長男（幼稚園年長組）も私と同様、一日に何回となく畑に入り、西瓜の成長をながめいつ食べられるかなあ、昨日よりものすごく大きくなったなあー等々一人で言っては楽しみに待っております。

そんな畑への出入りもここ数日間は御無沙汰、突然の夫の転勤、家の中は大騒動、夫の出世を願っていた妻である私もびつくり、三田市広野郵便局長を命ぜられ、着任することになったのです。平局員として今迄のんびりと気楽に過ごしてきただけに、急なる環境の変化に心も身もくた／＼、子どもの世話も放ったらかしで、あちらへ走り、こちらへ走り、あいさつ回りやら、御礼やら、緊張の連続、お蔭で夫婦そろって体重ががたへり、（夫は88kgあった体重が82kgに減り手の甲にしわがよる次第）新しい任務の重責を思うと、妻である私も夫と共に最善の努力をしなければならず、局長の妻として果して役割が立派に全う出来るかどうか不安なもので、神経の太い私も頼りない自分に腹を立てている今頃です。

毎年夏休みには二泊三日位の親子旅行も今年は返上です。この間そろえたゴルフセットも物置きでお休み中、何もかもがらりと変ってしまつて、喜びもつかの間、責任ある地位の重さを感じしみと痛感している昨今です。

## 【お便り】

熊本市 平山博子

七月十日

編集部の皆様 暑中御見舞申し上げます。

毎年のことながら、この暑さにはうんざり、参ってしまいそうです。

午前中は汗流しタイムと称して草とり、掃除、買物、病院通いとフルに動きまわり早くも真黒に日焼けしてしまいました。

私事で恐縮ですが、ボーナスで思いきってクーラーを買いました。十五時間労働で家にはめったにいない夫は、あまり乗り気ではなかったのですが、先日、疲労と腰痛でめずらしく四日間寝こんでクーラーのありがたみを分ってくれたようです。うだるようなデパート建設現場から夜中に帰宅しては涼しい部屋で「ああ、生きたここちがする」と言う夫に、高価なものだけど買って良かったと思っています。ただし電気代は今までの三倍はかかりそうで、この物価高とあわせて家計のやりくりには又また頭を痛めているところです。それから、私が33才の厄年の誕生日を迎えた翌日、四才の娘が交通事故にあり、顔面打撲、前歯二本をぬくというけがをしました。幸いにこれくらい軽いものでほっとしましたが、いつ命を、手足をもぎとられることになるか分らないようなこの交通事情、せまい市道をわがものがおいでいばりちらしながら走る車の列に怒りを感じます。最近では子供の自転車乗りもふえて、うちの長男も夢中で乗りまわしていますが、いつもあとを追うわけにもいかず、事故の心配が

つきまといます。

うちの近所はまだ空地があつていいのですが、都会の子供さんほどのように解決されているのでしょうか。公害も含み、本当に住みにくい世の中になってしまいました。

それから厄年って本当にあるものでしょうか、厄ばらいなど御存知の方、気持のもち方などお知恵をかして下さい。

七月十七日

116号受取りました。一通り目を走らせているうちに、別にアンケート用紙があつたことに気づき、あわてて記入した次第です。「母親が外で働くことについて」のテーマ原稿、興味深く読んでいます。高木さん、稲垣さんの実践にもとづく記録はそれなりに重みを感じられ、照井さんの場合は、外で働くことではないけれど他方面で勉強し生きがいを見つめておられる様子で同感するところもありました。只今、手のかかる三人のチビの世話にかかりつきりで、いつかはあれもしたい、こうもしようと夢ばかり語っている私には書きたいと思っても、気がひけてしまいます。

それに皆様とてもよく読書されていて、又その読後感想文のすばらしいこと！（ぜひ「解放への十字路」読んでみます）

ことに日頃つい見すごしてしまふようなことでも痛烈というか、小気味良い批判をまじえて豊かな表現力とたしかな自分の考えをもった後藤さんの文章には圧倒される感じ です。

定松さんは年代の違いによる空しさを感じることがあると記されておられますが、同じ年代の私でも自分の未熟さのために

あせりに似たいらだちを感じる時があります。

しかし、この刺激がほしいために私はわいふ会員になったのだと思ひなおしています。そして、もっと多くの違った会員の皆さんの文章や意見にふれることが出来たらと願っています。

子供の昼寝の合い間にとり急ぎペンをもちましたが、先の私事を並べた手紙やこの手紙がお便り欄に活字になることを思うと、充実している貴重なわいふの会員にもつたないような気がします。でも……………。

## 【短歌】

横浜市 原 圭子

歌会の友は来たらず座布団の

空しく並びてあるも寂しき

悪妻と言われしことの悲しみが

夫とむき合えば又よみ返る

土用干しの梅干並ぶペランダに

涼風すぎて紫蘇の香淡く

## 【お便り】

徳島市 佐藤 泰子

暑い日が続いています。わいふの皆様お元気ですか。

夏休みも近ずき四十日近い長いお休みを皆様どの様なプランをお立てでしょうか？。

私共では毎年高知の私の実家へ家族で一週間程行きます。阪神に近いけれど、まだ海は汚染されておらず、青く美しい海で泳ぐのを子供達もたのしみにしています。今年は主人が都合で行けませんけれど、大阪の妹の家族と打合せて七月末からゆく予定です。小学校二年生の長女が社会で今農家のくらしを習っているのでハウスの中の野菜や早い稲刈りなどみせてやりたいと思っています。長男は自称虫博士で虫の事となるともう目の色が変わり重い図鑑を持って行つて調べると大はりきり、それにおたんじよう間近い田舎の赤ちゃんにABCを教えるのだともう今からわい／＼言っています。

長男は今まで夏には田舎で必ず熱を出して向うの病院でお世話になったけれど今年は通園で身体も大分きたえられた様だし今年は保険証のお世話にはならないだろうと思っています。

ジーゼルカーと急行バスを乗りついで三時間、デラックスとは程遠いけれど、自然の中で親子ともどものんびりとすごしていきたいと思っています。

## 【読書室】

「八甲田山死の彷徨」

新田次郎著 新潮社 五二〇円

結婚当初、山好きの夫につき合つて、山岳ものの本を随分読みました。山岳ものの独特の「キーン」とでも表現されそうな、静寂さ、清澄さと、その中に割って入る生々しい人間葛藤模様が織りなすコントラストに魅せられたこと往々でした。久し振りに読んだ山岳ものの「八甲田山の彷徨」は、これ迄に読んだ山岳ものとは全く異なっていました。

明治35年、青森歩兵五連隊に起つた雪中行軍中の大惨劇を事実に基づいて書いた小説です。

日露戦争開戦必至の状況に先がけ、日本陸軍の最大の弱点である寒地教育、寒地装備を、シベリアの酷寒に耐え得る露軍に指抗するために、実験行軍をして、二つの連隊（弘前と青森）に雪の八甲田山縦走を命令して競争させたのです。防寒靴、防寒服の用意さえないこの無様な行軍が死への行進となる事は、予想されることでした。

弘前部隊の方は、少数精鋭主義に徹したこと、上層部の英断で、一人の経験ある大尉に、この行軍の全指揮を任せてしまったことで、奇跡的に成功しました。しかし、一方の青森部隊は弘前部隊に出遅れたことへの意地や面目で、210名にものぼる大編隊をくんでしまい、その内わずか11名だけがかううじて生還出来るという大惨事になってしまいました。

今、地図で見ると、どうしてこんなところで、と思いたくな

るような、ほんの山の入り口で事件は起っているのです。惨事となった直接の原因は、勿論雪山の非情さ、未曾有の悪天候ではあったのですが、真実の原因は、日露戦争を前にして

あせりにあせつた軍首脳部隊の思いつき、寒冷地における人間実験のゆきすぎが大きかったのです。

それにしても軍隊内の絶対的といえる上下関係の愚直さ、整然とあるべき命令系統に一たび乱れが生じた時の組織のもろさには改めて驚かされました。又、軍に使役される民間人（案内人、宿の提供者）への差別、兵隊自身よりも、下賜され、持たされている銃の行方の方が重く見られる異常さ等々、遠い昔のこととは思いますが一氣に興奮したまま読み終えました。

「この事件の関係者は一人として責任を問われる者もなく、転任させられる者もなかった。すべては、そのままの体制で、日露戦争へと進軍していったのである」と書かれた結びの言葉が頭から離れません。

むのたけし氏の指摘する戦後処理のなされなかった第二次大戦後の日本は、今、どんな道を進軍しつつあるのでしょうか。28年間歩み続けて来たと思われている平和への道は、幻ではなかったのでしょうか。今、わたし達は八月を迎え、戦争の話題にとり巻かれています。平和への本当の道を一日も早く探さねばならないとしきりに思えてなりません。

（後藤美和子記）

## 七月例会報告

◎テーマ——特集号を発刊することについて

●アンケートをどうまとめるか

1、A、B、Cのタイプ別に分類する

2、設問毎には分類しないで、個人別に羅列して載せる。その際、なるべく原文に忠実に要点をまとめさせて頂く。

3、118号（9月）を、アンケート特集として、これに全部をとりまとめて掲載する。

4、120号で、アンケートに表われた事柄の掘り下げを少しやってみる（11月）

○アンケートを読まれた会員の感想

○十周年記念集会（10月28日予定）へ出席された会員からのアンケートに関する意見

○編集部でまとめたアンケートの数字的結果等

●テーマ原稿の扱い方

テーマ原稿の特集を編むことは中止することにします。

その理由は、次に書いてみます。

1、原稿の集まり具合が、予想よりはるかに悪かった。

2、テーマの今日性、重要性にかかわらず、原稿の内容も、書き手側のバラエティにもとぼしく、先に100号記念で出した「私の受けた教育」のように、対外的に問題提起するまでには至らないと思えること。

3、「わいふ」の財政面からみて、何冊もの続けての増頁発行はムリであること。

4、原稿の集まりが悪いことに驚いて、多くの意見を求めるためにアンケートを実施して、こちらの方はかなりの成果を得られ、特集を一冊に絞るには、より多くの会員参加があったアンケートを主軸にする方が「わいふ」のために意義深いと考えられること。

5、テーマ原稿を書きたいと思いつながら、まだお書きになっていない方は、9月25日までに書いて送って下さい。

119号（10月）を、一応テーマ原稿の準特集の形で、このテーマ「母親が外で働くことについて」の終りにしたいと思えます。勿論、このテーマの性質上、これからほとんどこの種の原稿が集まることは大歓迎です。

6、これまでに、このテーマで原稿をお寄せ下さった方には大変ご迷惑をおかけしたことになります。編集部の方には、な考えで特集を発刊することが困難であることの見通しが、今日までつきませんで、申し訳なく思っております。尚、原稿の補遺、変更をすでになされた方ございましたらお送り下さい。119号（10月）の準特集の中に、入れさせて頂きます。

7、特集の発行はやめになりましたが、まだこのテーマでお書きになっていない方、特に（おそらく今後とも働かないだろうときめている人）からの原稿がありませんので、ハガキ一枚のご意見でも結構です。奮ってお書き送り下さい。〆切は9月25日です。

◎テーマ——十周年記念集会の持ち方をどうするか。

## ● 集会のこと

まず集会日の予定としては、10月28日（日）が考えられる。

時間は、昨年の集会出席者からの意見等もあり、帰宅時間をくり上げるため、開会時刻を少し早くして、従来通りの午後一時からを、軽食持参（パンと牛乳等）で午前中の内からにしてはどうかということ。

特に近在会員で出席可能者の方からのこの点についてのご意見を聞ききたいと思います。

集会のテーマは、現在募集中のテーマ原稿やアンケートの結果から、おのずと見つけはしないだろうかと考えています。

## ● バザーの開き方

毎年、記念集会と同時に開いているバザーは、苦しい「わいふ」の会計を、これまでに随分と助けて来しました。

会員の皆さんからの暖かいご協力のお蔭だと感謝いたしております。

ことしも十周年記念集会と併せてバザーを開きたいと考えておりますが、ここに一つ、例年バザーに関しての懸案事項があるのです。

それは、心をこめてよせられるたくさんの方の会員からの、山とつまれる出品物に対して、集会への参加者が余りにも少ないもので、集まった品物の売りさばきが大変むづかしいということです。これまでのバザーでの売れ残りの品物は、近在の施設への寄贈、次年度への持ち越し、或は一部、心ならずも廃品としての処分等々の方法をとって来ましたが、これらの

方法にも、それらの世話をする人数も少なく、限界があります。

ことしあたり、バザーの開き方そのものを検討しなおす時期に来ているようです。

「昨今の資源窮乏の声、消費悪徳説の風潮で、ことしのバザーは、中古衣料といえども売れゆき良好かもね」との見通しもたないこともないのですが、さりとて、デパートのバーゲンに匹敵する人氣がわくとも思えないしで、目下思案中といたところでは。

バザーの最大の目的、「わいふ」のために一円でも多い収益を上げたい気持には変りなく、「実の多いバザー」を開きたいという点では、例会出席者の意見は一致しています。

小包郵送料の高くなったこともあり、今年は遠い会員からの出品物は乞わず、集会出席者の持ち込む品だけを、お互いに売買することにしてみようかと考えております。

供給者と需要者のバランスがうまくとれるか否か不安もありますが、ことしは一応、この方法でやってみることにします。しかし、バザーまでにまだ少し時間がありますので、近在で出席可能な会員のご意見をもう少し伺ってから決めたいと思います。

以上を、七月例会の報告といたします。

出席者 小山、高木、十日市、鈴木、後藤

この他に、十日市家三姉妹がお揃いのリゾート・ウェアでかわいらしく参加してくれました。（後藤記）



## 編集後記

○じつと座っていても汗がにじみでる暑い毎日ですが、お元氣ですか。夏休みもいよ／＼後半に入りますが、そろ／＼親子とも退屈とわずらわしさが嵩じてきた頃ではないでしょうか。何日もかけて泊れる様な田舎がない我が家にとつて家族そろつての旅行となると二泊位が精一杯ですが、子供にとってはこれでは物足りないようです。先日の新聞に作家の山本道子さんが「夏休みは親の生活時間に子供をあわせる時だ」と書いていらつしやいましたが、どうも学校があつてもなくても子供に引っぱられるのは親の方の生活のようです。

○今月号は、森田さん、小川さん、森弘子さん、玉田さん、土喰さんなどめずらしい方から原稿やお便りを頂き、大変うれしく思いました。私にも雨の日わざ／＼靴をぬいではだして溝の中を帰った楽しい思い出があります。戦後の物資不足もあつたと思いますが、はだしになる事が少しも変ではなく、又、子供心にはだして直に感じる土の気持よき、安定感をよく知っていたからでしょう。すすんではだしになっていました。ところが現在、家の娘達も「はだしになってもいいわ」と言うところ「本当になつてもいいの」と聞きかえしておず／＼と靴をぬぎます。そしてうれしそうに飛びまわります。昔、子供達が何げなくやった事を、今は大人にさせてもらう——大きなちがいです。でも私達自身が持つてゐる子供時代の楽しい思い出を、今の子供達から取り上げたのは、私達自身でもあります。物の豊富さに目をうばわれている子供達からもうこんなものいらない、

自然を返して、遊びを返してと言われたら、その時は……。  
○「八月がくるたびに」——こんな本がありますが、この題の通り、八月になると、原爆、ヒロシマ等の言葉がよく目につきます。次女の誕生日は八月六日、丁度ヒロシマに原爆が落とされた日です。ささやかな誕生日をしながら、二十八年前のこの日の出来事を話します。子供が大きくなるにつれ、同じ話でも受取り方にちがいが出て来しました。今年は自分からずすんで原爆や戦争の本を読みたいと言いました。しかし振り返つて、話す私の方かというと、戦争の記憶はだん／＼と風化され、まして原爆の事となると、以前に二三の本を読んだ位で、その折の内容も感慨もあわいのものになつています。二十八年たった今尚、後遺症におかされ、ちゃんとした治療も受けられずひっそりと生きていらつしやる方々を思うと、心が痛みつつも、ああ広島にいてよかつたなあ——という単純な感慨に落付く自分を、同じ時代を生きていた者として後めたく感じます。二十八年間の平和というものの、中味は、交通戦争、公害、直接武器は持たなくても裏からの戦争援助等、これらが戦後私達が求めてつき進んできた目標だったのでしょいか。私自身、もう一度ヒロシマにたちかえり、この機会に色々の本を読むつもりです。

○主婦も夏休みがとりたいですね。そして宿題は、わいふへの投稿という具合に……。おからだに氣をつけて、楽しい夏をお過ごし下さい。

○八月例会は、お休みにします。九月の半ば頃に次の例会を予定していますので、その時は又、多数御参会下さい。

毎月一回十日発行

原稿・誌代の送り先

〒685 宝塚市仁川宮西町1の72

「わいふ編集部」

発行人 高木由利子

発行所 わいふ発行所

振替口座番号 神戸19515

印刷所 百合写植印刷有限公司

誌代 一部 百円（送料25円）

原稿〆切 毎月二十五日（以降翌月まわし）